

# みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## コメント

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 曾, 士才 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00008872">https://doi.org/10.15021/00008872</a>

## コメント

曾士才氏によるコメント 私自身は、1981年に初めて貴州省を訪ねました。そして94年からは、特にミャオ族の3つの方面、民族観光、民族教育、民族宗教を研究してきました。特に観光資源としてのミャオ族の歌や踊り、慣習、景観などに注目してきました。物質文化そのものについては深く研究してこなかったのが、李館長のご発表は、私にとって大変勉強になりました。

このミャオ族の文化資源としての銀飾りについて、李館長は3つのことを述べておられます。1つは、銀飾りの誕生、形成について。2つ目は、銀飾りの文様、造形について。3つ目は、銀飾りを取り巻く現状あるいは変化です。

第1点ですが、李館長は、ミャオ族の銀飾りの誕生時期について、文献と考古資料から明代に始まったと断定しておられます。また、その分布地域については、物産の豊かな貴州省東南部の長江水系の上流である清水江、澧陽河、あるいは沅江の流域、あるいは珠江水系の上流である都柳江流域であると紹介しておられます。そして、重要な指摘をしておられます。ミャオ族の銀細工職人が出現するのは清代であるという点です。一般に銀飾りというのはミャオ族文化を象徴するものなので、私たちはとかくミャオ族独自のもののように思いがちですが、これは本来は外来文化であった可能性があります。

私の友人で、故郷が李館長の論文にも出てきました清水江上流の台江县施洞鎮出身のミャオ族がいます。彼から聞いた話では、故郷にいるおじさんは銀の商いをしています。毎年、湖南省に行って銀の塊や銀の棒を仕入れてきて、それを地元なり周囲のミャオ族の銀細工職人に売っているそうです。このように銀飾りの原料は、今でも他の地から仕入れている構造が続いていることがわかります。李館長も指摘しておられますように、銀飾りの文様や形状についても、中原文化の伝統的な要素が選択されており、ミャオ族の文化資源としての銀飾りの形成は、ミャオ族文化と中原文化との接触、融合を抜きにしては語れないと思います。

第2点の文様、造形については、私自身はまったく不勉強で、李館長が具体的に事例をあげながら紹介しておられますので、私から特に述べることはありません。昨日開幕した特別展「深奥的中国」に合わせてつくられた図録の何ページでしょうか、雷山県のミャオ族の女性が銀製の頭飾りをしているのは私が撮ってきた写真ですが、あの写真は、12年に1回行われる大祖先祭であるところの「鼓社節」の時に撮ったもので、李館長が紹介されているように、普段のお祭り以外に、そういう大規模なお祭りにおいても欠かすことのできないものになっています。

本当はいろいろ李館長におうかがいしたいところなのですが、むしろ少し私のほうから補足してお話しするようなこともあるのかなと思って、ちょっと述べたいのですが、

清朝の時代にはミャオ族にとって銀は非常に重要な意味がありまして、銀飾り以外では、例えばお墓に遺体を埋葬する時に、「買水銭」あるいは「買水銀」でもいいですが、水を買うお金として銀を遺体のそば、あるいは髪の毛に入れて埋葬するという習慣があったようです。それだけ清代以降というのは、ミャオ族にとって銀は生活の中でなくてはならないものであるということがうかがえるわけです。

李館長が述べている3点目に入ります。ミャオ族の文化資源としての銀飾りの現状と変化について、李館長は、材質の変化、造形・文様の変化、それから銀細工職人の村の解体、あるいは技術継承者を取り巻く環境の変化をあげています。この3つの変化のうち最初の2つ、材質の変化と造形・文様の変化については、あまり驚くには当たらないかと思います。午前中のセッションの中でもどなたかが述べられたかと思いますが、イギリスの歴史学者エリック・ホブズボームが指摘しているように、伝統とは創造されるものである。むしろ変化するものなわけですね。ですから、そのことに関してはあまり心配しなくてもよいと言っていいでしょうか。むしろ伝統にとっては必然的なものかなと思っています。

3つ目の変化である銀細工職人の村の解体についてですが、李館長の論文からは、いま1つ実態がよくわからないので、本来ならおうかがいすべきことだと思っていますが、これが単に職人村が分散していったというだけの話なのか、あるいは銀細工の技術の伝承が途絶える危険性があるということをおっしゃられるのか、ここがよくわかりません。技術の伝承に関して、広西ではどうなのか、雲南についてはどうなのかということをおうかがいしたいと思っています。

ちょっと話題を戻しますが、1番目の材質の変化についてです。よく外部の者は、銀が本物で白銅は偽物であると言われる。例えばミャオ族の銀飾りとか織物を売る商売人なんかは、よくそう言うわけですが、村人レベルではどうなのかがむしろ大事なのではないかと思っています。もちろんその家の財力に応じて、銀を使うのか、あるいは白銅を使うのかという違いは出てきていると思いますけれども、村人自身が本物、偽物という概念では必ずしもとらえてはいないのではないかと私には思えます。これは文化の真正性というか、何が文化の本物なのかという議論ともかかわると思います。

話を先へ進めます。銀細工職人の技術の伝承の問題です。私が本来言うべきことではないのかもしれませんが、広西の方も雲南の方も生態博物館構想は最初は貴州から始まっているとよく指摘されていますので、その点に関して補足しながら、私の疑問を申し上げたいと思います。

民族文化の保護、発展に貴州省ではいち早く着手したわけですが、1980年代に1つ重要な構想が打ち出されました。それは、「露天博物館（野外博物館）」という構想です。ご存じの方もおいでかと思いますが、かつて貴州省博物館館長も務められた呉正光という人が提唱したものです。この構想を提唱したのは、彼がまだ貴州省文化庁においてに

なった時です。彼は、近代に入り、特に1949年の解放後の大きな社会変化、政治的な変動の中で、貴州の各民族あるいは貴州の地方文化が急速に衰退し、このままでは消滅する危険性もあるという危機感を持ちました。それを積極的に保護する必要を唱えて、この露天博物館という構想を打ち出したわけです。

これは、従来の「重点文物保護単位」という文化財保護の概念とは明らかに異なっています。それは、今はやりの言葉で言うと、非物質文化の保護の可能性が出てきたということです。具体的に言うと、村まるごとを保護しますので、建物や景観だけではなく、そこでの人々の営み、あるいは歌や踊りも保護の対象になるわけです。しかし、この時点でも、非物質文化の保護という意味では、まだ完全なものではなかったと思います。

その後、ここで幾度となく話題が出てますが、90年代の終わりごろからスタートしました生態博物館という構想が一方であり、また一方ではユネスコの世界遺産という概念が中国にももたらされたために、非物質文化の概念が広く浸透しました。私が実際に行っている台江県、あるいは錦屏県といったところでは、小学校や中学校の体育の時間あるいは音楽の時間に、ミャオ族の歌や踊り、あるいは明代に移住してきた漢族のお芝居「漢戯」が子どもたちに伝承されています。このように非物質文化、日本で言うところの無形文化財が次の世代に継承される1つの仕組み、システムが生まれています。

ここで皆さんにおうかがいしたいのですが、こういう段階になってもまだ、例えば先ほどの銀細工職人の技術の伝承とか、機織りの技術の伝承とかいったものを、組織的な取り組みとして保護する動きがあまり見られない。もちろん先ほどの伝習館の動きもありますし、貴州省東南部でもさまざまな民間の動きはあります。しかし、それは個別のボランティアがやったもの、あるいは営利目的にやっているものであり、必ずしも小中学校の体育の時間に学ぶ時間を設けるというような組織的な取り組みではありません。この点について、例えば広西での取り組みはどうなのか、あるいは雲南での取り組みはどうなのか。何かお考えがあるか、現在実際に取り組みをやっているということがあれば、教えていただきたいと思います。

中国は、どんどん無形文化財（非物質文化）に対する手厚い保護を始めていると思いますが、技術の伝承、工芸細工の技術の伝承という面で、まだ私の中ではよくわからないので教えていただければと思います。以上です。ありがとうございました。



「西江式」の銀製頭飾（銀角）。銀製項圈（ネックレス）、圧領（首から下げる装飾品）を付けている。（於：凱里市三棵樹鎮）



台江県施洞鎮の盛装。頭飾、幾重にも下げた首飾りなど、銀製装身具を多くまとう。